

## エッセイ

古歌を訪ねてその八  
「行く水に数書く」  
はかない片想い

丹下 重明

行く水に

数書くよりもはかなきは

思はぬ人を思ふなりけり

古今和歌集・恋歌一(522)

今年の正月、テレビを見ていたら、各地のお正月風景を紹介する番組がありました。

そのなかで海外の風景の一つ、中国東北部のハルビン市の街頭風景がありました。一人の高齢の男の人が、凍った路面に、水をたっぷり含ませた、人の背丈ほどもある毛筆で文字を書いているのです。その草書文字の見事に驚かされました。内容は毛沢東の詩だそうです。

残念ながら、その文字は太陽が高く昇るとともに、はかなく消えてしまうとのことでした。

◇ ◇ ◇

はかなく消えてしまうというところで、ふと思ひ出した一首が冒頭の歌です。「思はぬ人」とは自分を思ってくれない人のことです。

そういう人にくら思いを寄せても、しよせんは川面に数をかくように、すぐ消えてしまふはかないものだ、と言っています。片想いの恋のつらさ、むなしさを詠っているのです。

古今和歌集(以下古今集)の撰進が九〇五年ですから、一一〇〇年以上昔の歌と思われるのですが、難しいところはなく、現代人でもすぐ理解できる内容です。

古今集には四五〇首もの『詠み人知らず』の歌があります。平凡な作品も多いのですが、この歌をはじめいくつかの歌は、今日でも名歌とされているものもあるのです。

この歌は想像ですが、当代の貴族社会では、一首の意味は、「ああ、もつともだよな、そのとうりよね」と誰もがわかっていたでしょう。現代のわれわれも同じだと思えます。こうした片想いの恋の経験を持つ人は、時代を超え、洋の東西を問わず、沢山いるのではないでしょうか。

◇ ◇ ◇

古今集よりも古い「万葉集」に次のような歌があります。

水の上に数かくこときわが命  
妹に逢はんとうけひつるかも

作者未詳

万葉集卷十一(2433)

上二句には命のはかなさを、水の上に数書くように、と詠んでいます。「うけひつる」とは神に祈るといった意味です。この歌は命のはかなさを詠っていて、片想いの恋の歌ではありませんが、「妹」とは妻や恋人を指しますから、恋歌の一つといえます。

江戸時代の国学者で歌人でもあった契沖によると、これは涅槃經にある「是身無常」とか「亦如画水」(人の身は常なきもの)(また水に描けるがごとし)が原典で、この精神を汲んで詠んだ和歌が、前記の一首だとのことです。冒頭の古今集歌もこの延長上にある歌です。

◇ ◇ ◇

わが国最初の勅撰和歌集の古今集は、部立の中で四季の部と恋歌の部とに重きがおかれています。

特に恋歌は、巻数二十のうち、巻十一から巻十五までの五巻ありその歌数は360首、古今集全体の三割強を占めています。

「源氏物語」などに代表される恋愛文学の多い時代。勅撰和歌集の世界でも、「恋の平安時代」らしい当時の貴族社会の恋愛への意識をうかがわせることのように思われるのです。

その恋歌は、恋の進行状況に順じた歌の配列となっています。冒頭の歌は最初の巻十一にあり、恋の進行状況がごく浅いことを表しているのです。「はかない片想い」はその一つという訳です。

ちなみに巻十五ともなると、終わった恋への恨みつらみ、懐かしみなどの恋の想い出を詠むといった歌が多く見られます。一例をあげれば、小野小町の作で次のような歌もあります。

今はとて

わが身時雨にふりぬれば

言の葉さへに移るひにけり

恋歌五(七八二)

一首の大意は「私が秋の時雨のように、年老いてしまったので、も

う相手にされず、あなたの言葉さえ変わってしまった」という嘆きの歌です。

◇ ◇ ◇

冒頭の古今集歌は、その後も多くの派生歌を生んでおり、その人気のほどがうかがわれます。

古今集からちようど300年後の1205年に撰進された歌集が「新古今和歌集」（以下新古今集）

です。すでに時代は鎌倉時代に入っていました。古今集に始まった勅撰和歌集の八番目、いわゆる「八代集」の最後を飾る歌集です。王朝和歌の伝統を受け継ぎつつ、独自のレトリックと香りに満ち満ちた歌集です。

この歌集の巻十五・恋歌五に、「天曆御歌」とあって村上天皇の作になる一首があります。

水の上の

はかなき数もおもほえず

深き心しそこにとまれば

言うまでもなく、本歌は古今集の「ゆく水に……」です。大意は「水の上に数書くことのようにはかないと、片想いの辛さを詠んだ歌もあるが、あなたを恋する深い思い

が、あなたの心にとまったので、そんなことは思わない」。相手の思う気持ちが強いので、片想いはかなさなどないと、本歌を超える内容になっています。

なお掲載されている歌集は新古今集ですが、村上天皇は62代の天皇で、その在位は950年前後です。この歌は、むしろ古今時代直後の詠歌なのです。

その恋の相手は、村上天皇の女御の一人だった微子女王（斎宮女御）です。本誌75号で取り上げたことのある人物で、三十六歌仙の一人です。

◇ ◇ ◇

ずっと下って、江戸時代後期の歌人・良寛もこんな歌を詠んでいます。

水の上に

かず書くよりもはかなきは

おのが心を頼むなりけり

上三句までは、「行く水に……」

とほぼ同じで、四句目以下では、自分の心を当てにすることの頼りなさを歌にしているのです。

良寛にはこの他にも、これに似た作品があります。

水の上に

かず書くよりもはかなきは

み法をはかる人にぞありける

行く水は

せき止めてもありぬべし

往きし月日のまたかえるとは

先の方の下句の意味は、「仏の道を素直に受け入れずに、あれこれ勝手なことをいう人であるよ」といった意味です。

良寛は禅僧だったがだけに、はかなさや無常につながる、「行く水」とか「水の上に」といった表現を好んでいたのかもしれない。

◇ ◇ ◇

「竹取物語」とともに、わが国でもっとも古い物語文学として知られる、「伊勢物語」五〇段にもこの歌が載っています。

この章段も、例によって伊勢物語の出だしによく見られる「むかし男ありけり」で始まります。浮気な男女が、互いに相手の愛情の薄さをなじり合う歌のやり取りで、ほぼ五首の歌のみで構成され、その中の四首目にこの歌があるので

古今集と伊勢物語とはほぼ同じ頃に生まれた作品ですが、いづれが先かは今日でも明確ではないといわれます。

その理由の大きな一つに、伊勢物語の一二五ある章段が、同時期に書かれたものではないことがあります。ある章段は、古今集よりも古いもの、ある章段は古今集よりも新しいものと考えられているからです。

ただ、この一首はおそらく、伊勢物語の作者（ただし作者は不詳）が、古今集にあるこの歌を引用したものと考えられます。この五〇段については、古今集より後に書かれた可能性が強いといわれているからです。

五首の3番目以下は、次のようになっています。

『また、男、

吹く風に

去年のさくらは散らずとも

あな頼みがた人の心は

また、女、返し

行く水に

数書くよりもはかなきは

思はぬ人を思ふなりけり

また、男

行く水と

過ぐるよはひと散る花と

いづれ待ててふことを聞くらむ』

と続き、最後は『あだくらべ、か  
たみにしける男女の忍び歩きしけ  
ることなるべし』と結んでいます。

男女二人が、それぞれに、別の男  
女とこっそりとしていた浮気を比  
べあつて、歌のやり取りをしてい  
たというのです。少々意味不明で、  
どこかふざけたような、後味の悪  
さを感じる章段です。古今集の「行  
く水に」の歌の素朴で純情な味わ  
いが無くなつてしまつて、少し残  
念な気がするのです。

◇ ◇ ◇

いづれにしても、「行く水に数  
書く」とは、「はかなさ」を意味  
する比喩としてとてもびつたりく  
る表現です。冒頭の古今集歌は、  
平凡のようでありて非凡な作品だと  
思うのです。

作家・随筆家で王朝文学を中心  
とする文芸評論でも知られる竹西  
寛子氏は、この歌について、著書  
「古今集の世界」のなかで、次の  
ように書いていられます。

『水に数書くはかなさを、実感  
として理解できない人はまずいな  
いでしょう。そういう、ごくあり

ふれた感覚にまず訴えながら、作  
者の言いたいののは、それよりも  
もつとはかない感覚なのだという  
表現の方法に私は注目します。』  
ありふれた言葉で、ありふれない  
表現ができることの適切な例が、  
この歌にはあるということを説い  
ていられます。

人生、一度くらいはこんな「は  
かない思い」に悩み感ったことの  
あるのが人間というものでしょう  
か。あらためてこの古い昔の、詠  
み人知らずの歌を、読み返してみ  
たいと思うのです。

行く水に

数書くよりもはかなきは  
思はぬ人を思ふなりけり

おわり

